

帝王と云ふよりも大統領と云ふよりも更に尊貴なる名号

神学部助教

杉田 俊介

神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

(創世記 1章26節-27節)

キリスト教には、人間は「神の像」であるという考え方があります。先ほど読んだ創世記 1章 26 節に、神の「『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう』」という言葉があります。ここにある「かたどり」という表現が、「神の像」という言い方の由来になっています。

神は神聖な存在です。その神にかたどり、似せて人間が造られたということは、人間もまた、神と同じように、神聖なものを内に宿しているということです。だれもが神聖な、尊厳ある存在であること——そのことを「神の像」という言葉は表しています。それゆえにドイツの神学者モルトマンは、この箇所を「古代の人権宣言」と呼びました。

もちろん、「神が人を創った」と言われても、そんなこと信じられるわけがないと思う方が多いでしょう。もとより、これは神話的物語であり、これをそのまま信じる必要はありません。重要なのは、この神話的物語を記した人々が、この物語を通して何を語ろうとしたのか——その意図を、時代背景を踏まえて考えることです。

この箇所を書いたのは、紀元前 6 世紀半ばの、古代イスラエルの祭司たちです。この時期、古代イスラエルの民はバビロニア帝国によって国を滅ぼされ、住み慣れた地からバビロンへと強制移住させられていました。国を失い、住み慣れた地から無理やり引き離された、無力さのただ中であつた人々が、この箇所を書かれたのです。

もう一つ、この箇所を読む上で重要な点があります。それは、「神の像」という表現は、「創世記」が書かれるより前から、古代中東で使われていた一種の慣用表現だったということです。ただし、その用法は異なっていました。

もともと中東世界では、「神の像」という言葉が、王の称号として使われていました。たとえばエジプトでは、ファラオを「地上の生ける神の像」「太陽神の像」と呼んでいました。アッ

シリアやバビロニアにおいても、王は「神の像」と呼ばれていました。

王は「神の像」である——これは、裏を返せば、王だけが神のごとき尊厳を持ち、一般の民はそうではない、ということでもありました。バビロニア神話でも、神々は王以外の人々を、王に奉仕させるために造ったとされています。つまり、「神の像」という表現はもともと、王を神格化し、その支配を正当化するための言葉だったのです。

では、創世記はどうか。古代イスラエルの祭司たちは、先に成立したバビロニア神話を参考にしてこの箇所を書いたと考えられており、内容的にも多くの共通点があります。ただ、彼らは決定的な書き換えを行いました。それは、「王」ではなく、「人」が、「すべての人」が「神の像」として造られたという書き換えです。

「王」を「人」に置き換えることによって、「神の像」という表現の意味は一変します。王だけでなく、だれもが自らのうちに神聖なものを宿している——国を滅ぼされ、住む場所を追われた当時のイスラエルの人々もまた、ひとりひとりが神聖で尊い存在である。王の支配を正当化する物語が、王だけではなく、すべての人間が尊いという物語に変わるのです。

こうして見てくると、この言葉を「古代の人権宣言」と呼ぶのも、決して誇張ではないことがわかるでしょう。

「神の像」という考え方の現代的意義を考えるために、ひとりの同志社の卒業生を紹介したいと思います。柏木義円という人物です。1880年に同志社英学校に入学して新島襄に学び、卒業後は群馬県の安中教会で牧師を務めながら、『上毛教界月報』という月刊誌を自ら発行し、教育勅語批判や非戦論など、数多くの優れた論説を残しました。

その柏木が好んだ聖書の言葉——それが、今日取り上げた創世記 1 章 26 節から 27 節です。柏木の特色は、この聖書の言葉を遠い昔の物語としてではなく、自らの生きた日本社会の現実在即して受け止めたことにあります。たとえば、1911年に発表した「人道に関する一問題」という部落差別問題を扱った論説で、次のように述べています。差別語が含まれますが、原文のまま引用します。

実に凡ての人は神に象りて造られたる尊貴なる靈性を有し、チャンニングは、「人間なる名称は帝王と云ふよりも大統領と云ふよりも遙に尊貴なる名号」だと唱へて居る。何者の陋習ぞ、敢て均しく此の尊貴なる神の子たる同朋人類を区別して穢多非人と侮蔑するとは。

古い言い回してわかりにくかったかもしれませんが、柏木は創世記やアメリカの神学者チャニングの言葉を引用しつつ、帝王や大統領といった特定の人だけが尊いのではなく、すべての人が「神の像」であり、尊い存在であるといっているのです。そしてそのことを踏まえて、出自によって人を区別し「穢多非人^{えいたひにん}と侮蔑する」ような悪習を厳しく批判しているのです。

さらに柏木は、若い教員が、被差別部落出身であることを理由に縁談を止められ、自死したという悲しい事件に触れつつ、目下、差別に苦しむ人々に向けて、自らの尊さを信じ、自らを大切にしてほしいと語りかけています。

この他にも多くの文章で、柏木は創世記の言葉を踏まえつつ、個の自由と尊厳を訴えています。特に、人間を国家のための道具、歯車のようにみなすこと、国家のため、天皇のために個の自由と命を犠牲にせよという風潮を、晩年まで一貫して批判し続けました。

私たちの時代はどうでしょうか。「すべての人が尊厳を持つ」という理念は、今や当然のこととされています。しかし、その理念が現実の社会で実現しているかは、また別問題です。

ご承知の通り、出自による差別はいまも根強く残っていますし、人間を国家のための道具とみなす考えも厳然としてあります。海外には、今この瞬間も、戦争の中で命と尊厳を軽んじられている人々がいる。

「すべての人が尊厳を持つ」という理念は、いまだ現実とは言いがたい。でもだからこそ、古代イスラエルの祭司たちの「すべての人は、神にかたどり、神に似せて造られた」という言葉に、耳を傾けたいのです。そして柏木のように、この言葉を現代の現実の中で受け止め、少しでもこの時代と向き合う者でありたいのです。

すべての人が「神の似姿」である——そのことを心に刻み、隣人と共に歩んでまいりたいと願います。

祈りをささげます。黙祷を持って、祈りに加わってください。

主なる神様、あなたがすべての人をあなたの似姿として造ってくださったことを思い、隣人を敬い、愛のわざに励みながら生きることを得させてください。この学び舎に集う学生ひとりひとりを祝し、その学びが善きわざのために用いられますように。主イエス・キリストの名によって祈ります。